

論文内容の要約

学 生 番 号	3216005	指導 教員 確認		主 査	植木 純
氏 名	馬場 由美子		副 査	飯島 佐知子	
			副 査	大西 麻未	

学 位 論 文 名	急性期病院における看護師へのニーズアセスメントに基づく転倒予防教育プログラムの開発と評価
訳 タ イ ト ル	Development and evaluation of fall prevention education program based on needs assessment for nurses in acute care hospitals
共 著 者	

論文内容の要約 (1057/1,000 字～1,500 字)

【目的】 転倒予防を適切に行うには看護師に対する教育が重要と考えられるが、急性期病院の入院患者への転倒予防に関する教育ニーズアセスメント (以下、アセスメント) に基づいた教育プログラムは開発されていない。そこで本研究は、急性期病院の一般病棟における看護師を対象に、アセスメントに基づく転倒予防教育プログラムを開発し、その効果を評価することを目的とした。

【方法】 研究デザイン: 調査1 質問紙調査 調査2 介入研究 非ランダム化並行群間比較試験
実施手順: 本研究は、Kern らによる教育プログラムの開発、改善、維持、普及のための 6 段階アプローチ (Kern et al., 2003) を参考に実施した。

調査1. 転倒や転倒損傷を減らすためのガイド (Veterans Affairs National Center for Patient Safety, 2015) に基づくアセスメントを実施し、教育プログラムを作成する。

調査2. 介入群 2 病棟に対して作成した教育プログラムを実施し、対照群 2 病棟へは教育を行わなかった。プログラムの評価方法は、介入前後の質問紙調査及び病棟ラウンド、記録物、データによって、転倒予防に関する知識の程度や実施状況、転倒報告率・損傷率、自己効力感、転倒予防対策の遵守率、研修への満足度で評価する。

【結果】 介入前後のすべての質問紙に回答した介入群 10 人、対照群 8 人のデータを分析対象とした。介入群の知識の平均値は、アセスメントに基づき教育した項目では介入前 3.63 から介入後 4.03 へ上昇した ($p < .001$) が、対照群と差はなかった ($p = .077$)。実施状況は、介入前 2.86 から介入後 3.36 へ上昇し ($p < .001$)、対照群より 0.64 上昇していた ($p < .001$)。介入前後 6 か月間の転倒報告率は、介入群 3.06% から 2.83% へ減少したが、対照群との差はなかった ($F = 4.46$, $p = .06$)。病棟ラウンドで介入後の変化を確認すると、転倒予防対策への患者の参加や移動動作評価方法が導入され、転倒後の予防対策立案にスタッフが積極的に参加するようになっていた。また、センサー機器を付けたことについての申し送りが増え、転倒予防のために使用していない点滴スタンドが片付けられていることが多くなり、率先して環境整備が行われるようになっていた。自己効力感は介入後 11 項目中 4 項目が有意に向上した。また研修への満足度の平均は 3.8 であった。

【考察】 介入後、転倒予防対策の実施状況の自己評価が向上し、転倒予防対策への患者の参加や移動動作評価方法の導入など、スタッフの行動変化がみられたことから、本プログラムの実施が転倒予防対策の推進に寄与したと考える。

【結論】 アセスメントに基づく転倒予防教育プログラムは、平均値では知識や転倒予防対策の実施や行動の変化がみられた。